



今日までとこれから

浅野珠里¹

東京への片道きっぷを握りしめて見上げた名古屋駅の電光掲示板は、涙で少しぼやけて見えました。春の天気のように期待と不安が錯綜する中、新たな一步を踏み出した日でした。私はこの3月に岐阜大学大学院自然科学研究科の修士課程を修了し、4月から東京大学大学院農学生命科学研究科の博士後期課程に進学しました。本稿では、私が博士課程に進学するまでの話を記したいと思います。あらずじとしましては、学部卒で公務員になると思っていた著者が、博士課程への進学を決め、奨学金申請書に苦しむ話です。

修士課程への進学を決めた B4 春

学部4年生で研究室に配属され、土壌ゼミ (<https://sites.google.com/view/soilseminar/home>) に誘われました。土壌ゼミとは土壌を学ぶ学生がオンラインで勉強する学生主体のゼミです (Fig. 1)。活動内容はその都度メンバーで決めていますが、おもに研究紹介をしたり、論文や教科書を輪読したりしています。現在は鹿児島大学大学院連合農学研究科の田崎小春さんと一緒に世話人としてゼミの運営をしています。学会での交流のきっかけや、就活などの情報交換としても役立っています。今でこそ土壌ゼミでの勉強を毎週楽しみにしている私ですが、土壌ゼミに参加してはじめての数か月は分からないことだらけでした。しかし、当時世話人をしていた明治大学 (現・国立水俣病総合研究センター) の丸尾裕一さんは、土の研究を始めたばかりの私にもよくわかる説明をしてくださいました。その知識の豊富さ、説明力の高さに、私もこうなりたいと漠然と思うようになりました。その頃の私は、学部を卒業して公務員になろうと試験勉強をしていましたが、土壌ゼミで丸尾さんや他大の院生の方々を見ているうちに大学院に進学してもいいかも、と思うようになり、修士課程への進学を決めました。

博士課程への進学を決めた B4 秋

卒業研究が本格的に始まった B4 の夏ごろから研究がとても楽しく感じるようになりました。何をしているときよりも、研究をしているときの自分が好きになりました。メインの研究テーマの他にサブテーマにも取り組み、研究に熱中しました。そして、B4 の秋ごろに博士課

程進学を決めました。大学教員になって研究の楽しさを多くの学生に伝えたいと思ったからです。当時の指導教員である岐阜大学の小島悠揮先生と何度も相談し、博士課程は東京大学の西村拓先生のもとで研究することにしました。ちなみに両親は修士進学の時点で想定外な中、博士課程への進学を話すと、文字通り目が点になっていました。両親から帰ってきた言葉は「話が違う」でした。両親の疑問はいくつかあり、なぜ進学したいのか、卒業後はどうするのか、そしてこれは私の懸念事項でもありましたが、金銭面の心配がありました。費用については給付型奨学金で何とかするつもりでしたが、万が一の場合には両親のすねをかじることとなります。言い方は不適切ですがスポンサーには納得してもらわないといけません。両親の問いに私はひとつひとつ丁寧に説明しました。両親は、給付型奨学金がもらえるなら…という条件で博士進学を認めてくれました。ここから私の奨学金申請書作成の日々が始まります。

奨学金申請書を出し続けた M2

まずは M2 の4月に民間の給付型奨学金に応募しました。生活費が完全に賄える点と、授業料、研究費、海外研修費まで支給される手厚い財団でした。さらに、5月には日本学術振興会の特別研究員 (学振) に応募しました。この2つの奨学金には博士課程での研究についての

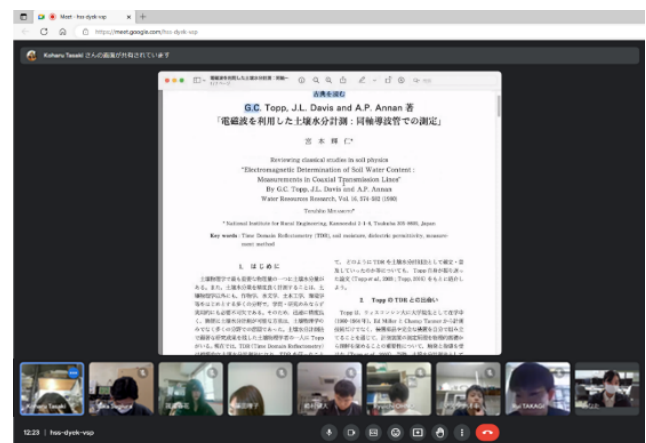


Fig. 1 土壌ゼミの様子。この日は論文の輪読をしました。

¹ 東京大学大学院農学生命科学研究科
2024年5月2日受稿 2024年5月10日受理

記述もあるため、申請書はM1の12月から書き始めました。早く金銭面の不安をなくしたかったので、どちらかで採択されるべく、長い準備時間を設けました。たくさんの人に申請書を添削してもらい、推敲を重ねました。しかし結果はどちらも不採択。不採択通知をもらった夜は悔しくて涙が止まりませんでした。単に金銭的な心配が続くだけでなく、研究者不適格の烙印を押された気がしました。さらに、採択者が研究に割いている時間を、私は別の申請書作成に使う必要があり、すでにある採択者との差がどんどん広がっていくような気がしました。

そこからは全落ちを避けるために少額の給付型奨学金に応募しました。少しでも家の負担を減らそうと、出せる資格のある民間奨学金にはすべて出しました。とはいっても、M2の夏から出せる奨学金というのはほとんどなく、出せたのは3つでしたが、そのたびにたくさんの人に読んでもらい、小島先生に推薦書を書いてもらいました。それでも現実にはそう甘くなく、すべて不採択でした。申請書を出しても出しても採択につながらない私を見かねた両親は、3年で卒業できるならなんとかお金は用意できると言ってくれました。

そんな背水の陣の私に残されたのは、東大のSpring GX (JST次世代研究者挑戦的研究プログラム)でした。支援は学振と同等で、学振が取れなかった博士学生の生活を支援するための事業です。修論の提出からSpring GX申請書締め切りまで約2週間でしたが、これまでの申請書のどこが良くなかったのかを考えながら書きました。さらに、現在の指導教員である西村先生とこれまで以上に研究内容について話し合い、より具体的な研究計画を記述しました。結果発表の日は前日から眠れず、結果発表時間は小島先生との研究打ち合わせ中でしたが正

直それどころではなかったです。何度も自分の番号を確認し、打ち合わせを中断して小島先生にも番号を確認してもらいました。私の申請書は6件目にしてついに採択されました。1年におよぶ長い長い冬が明け、春が訪れた瞬間でした。

おわりに

今回は、私が博士課程進学を決め、奨学金採択までの話をしました。進学直前に滑り込みで奨学金をいただけることになりましたが、この結果は私のみの努力で得られたものではありません。小島先生や西村先生を始めとした数多くの先生方や周りのサポートなしでは採択されなかったと強く思います。この記事で、私が不採択ばかりの決して楽しくない話題をテーマにしたのには理由があります。それは、奨学金の、それも不採択の情報はあまり出回っていないからです。どこの世界でもそうですが、成功者の話はあまた存在するのに、失敗した人の話はなかなかありません。だから私も不採択のたびにひどく落ち込みました。でも、1通の申請書の背景にはその何倍もの「出せなかった人、出さなかった人」がいて、本当は出ただけで十分立派なのだ自分に言い聞かせました。そこで、これまで(これから?)注目されてこなかったであろう奨学金不採択事情を公開することにしました。どこかの土壌物理を学ぶ後輩学生さんが、奨学金申請で悩んだ時、落ち込んだ時に、この土粒子が少しでも心の支えになれば嬉しいです。私自身は、今後もより一層研究に力を注いでいきたいと思います。そして将来、研究費獲得で辛い思いをした時、この経験を思い出して頑張ろうと思います。最後に、学生であるにも関わらず、土粒子への投稿機会をくださった「土壌の物理性」の編集委員会のみなさまに感謝申し上げます。